



怒りと悲しみと

’07 教育講演会＋映画上映

蟻の兵隊

第1部：映画「蟻の兵隊」上映

キネマ旬報ベストテン第2位（文化映画部門）、香港国際映画祭 人道に関する優秀映画賞
日本映画ペンクラブベストファイブ第1位（文化映画部門）

第2部：講演（池谷薫監督）主演の奥村和一氏も来場の予定！

日時：11月17日（土）13：30

（13：00受付開始、16：10終了予定）

場所：安城市文化センター1Fマツバホール

（JR安城駅から1km、徒歩15分、安城市役所隣 TEL 0566-76-1515）

主催・連絡先：愛知県高等学校教職員組合西三南支部
（TEL 0566-82-5020）

入場無料

今も体内に残る無数の砲弾の破片。それは**“戦後も戦った日本兵”**という苦い記憶を 奥村 和一 (おくらわいち) (80)に突き付ける。

かつて奥村が所属した部隊は、**第2次世界大戦後も中国に残留し、中国の内戦を戦った。**しかし、長い抑留生活を経て**帰国した彼らを待っていたのは逃亡兵の扱いだっ**た。世界の戦争史上類を見ないこの**“売軍行為”**を、日本政府は兵士たちが志願して勝手に戦争をつづけたと見なし黙殺したのだ。

「自分たちは、なぜ残留させられたのか？」真実を明らかにするために中国に向かった奥村に、心の中に閉じ込めてきたもう一つの記憶がよみがえる。終戦間近の昭和20年、奥村は**“初年兵教育”**の名の下に罪のない中国人を刺殺するよう命じられていた。…やがて奥村の執念が戦後60年を過ぎて**驚くべき残留の真相と戦争の実態**を暴いていく。

これは、自身戦争の被害者でもあり加害者でもある奥村が、“日本軍山西省残留問題”の真相を解明しようと孤軍奮闘する姿を追った世界初のドキュメンタリーである。



日本軍山西省残留問題

終戦当時、中国の山西省にいた北支派遣軍第1軍の将兵 59000 人のうち約 2600 人が、ホツダム宣言に違反して武装解除を受けることなく中国国民党系の軍閥に合流。戦後なお4年間共産党軍と戦い、約 550 人が戦死、700 人以上が捕虜となった。元残留兵らは、当時戦犯だった軍司令官が責任追及への恐れから軍閥と密約を交わし「祖国復興」を名目に残留を画策したと主張。一方、国は「自らの意志で残り、勝手に戦争を続けた」とみなし、元残留兵らが求める戦後補償を拒み続けてきた。

2005 年、元残留兵らは軍人恩給の支給を求めて最高裁に上告した。

会場地図→

